

# 2016 熊本地震 胆沢病院DMAT 活動報告

災害医療科長（日本DMAT隊員 統括DMAT） 忠地 一輝

## 1. はじめに

当院は地域災害拠点病院に指定されており、災害医療支援チーム（Disaster Medical Assistant Team：以下DMAT）を編成することが義務づけられております。当院基本理念にも災害医療への取り組みとDMATチームの派遣を掲げております。

DMATは医師、看護師、業務調整員を構成員とし、各職種からなる4-6名で1チームを編成します（業務調整員は事務、診療放射線技師、臨床工学技士、薬剤師等多数の職種からなります。災害現場では最も重要な役割を担う職種といっても過言ではありません）。当院には現在、日本DMAT隊員16人（医師5人、看護師7人、業務調整員4人）、岩手DMAT隊員3人（看護師2人、業務調整員1人）の計19人がおりますが、院内勤務状況や家庭状況などにより常に全ての人が出動できる状況ではありません。そんな中、今回熊本地震に出動する機会を与えていただきましたのでご報告申し上げます。

## 2. 熊本地震について

4月14日（木）21時26分、熊本地方を震源とするマグニチュード6.5の地震が発生、益城町で震度7を観測（その後「前震」と定義）。4月16日（土）深夜1時25分、同地方を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生し、西原町と益城町で震度7を観測。この地震は「本震」と定義され、「本震」は「前震」の16倍の規模（阪神淡路大震災と同規模）であったと分析されました。

## 3. 出動まで

DMATの出動命令は厚生労働省DMAT事務局からメールで来ます。震度7を観測する地震が起きた際には「自動待機基準」となり隊員は出動に備える必要があります。今回の「前震」の時にも自動待機命令が出ておりました。さらに4月16日3時14分に近隣のDMATには派遣命令が、全国のDMATには再度待機命令が出ました。

当院では、朝4時過ぎに院内DMAT隊員にメールを送り、医師1名、看護師3名、業務調整員1名の計5名が出動可能と判断。他の隊員を含め計10名が病院に集合し、出動に必要な資機材（医療器具、パソコン、プリンター、衛星携帯電話など）の準備を行い出動に備えました。

## 4. いよいよ出動

4月16日16時過ぎ、東北地区のDMATに派遣要請が出ました。即座に院長に出動許可をとり、当院のDMAT用緊急車両で松島基地へ出動しました。

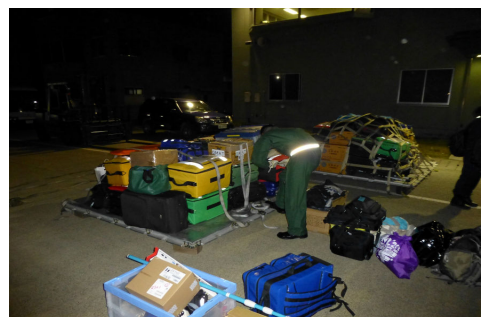


待機した隊員は、熊本に出発した隊員を支援するため、情報収集・連絡調整・物資支援の手配など、隊員が帰還するまで後方支援を行いました。

## 5. 松島基地から福岡築城基地を経て活動拠点本部へ

松島基地に参集した東北DMATは計8チーム。東北大学病院、大崎市民病院、仙台医療センター、東北労災病院（以上宮城県）、福島県立医大病院、山形県立中央病院、岩手医科大学付属病院および当院でした。

各チームの医療資機材を航空自衛隊機C-1に搬入、我々も同機に搭乗。松島基地を20時過ぎに飛び立ったC-1は福岡築城基地に22時頃着陸。築城基地から自衛隊の運転するマイクロバスに乗り、陸路で道なき道を走り大分県竹田市に入り、夜中の3時頃より活動を開始しました。



航空自衛隊機 C-1に搬入する医療資機材

## 6. 胆沢病院DMATの活動内容 ① ～ 産山村調査 ～

東北8チームは大分県県境に位置する竹田市から熊本県に入り、阿蘇地域で活動することが決定しました。熊本市と阿蘇市を結ぶ幹線道路が遮断され、大分側から阿蘇に向かう必要があったためです。

胆沢DMATの任務は熊本県産山村の医療状況調査および阿蘇温泉病院調査に決定。産山村は人口1,700人程の村で、農家が多く自給自足が可能なため食事は問題なくできておりました。消防団が各家庭を巡回し、既に全ての村民の安否は確認済みでした。診療所が各家庭から15分以内の所に位置しており村民の健康状態も問題ないと報告を受け、産山村調査を終了しました。しかしながら、村内に避難所が4箇所できていたため、これらの調査をすべきであったと反省いたしました。

## 7. 胆沢病院DMATの活動内容 ② ～ 阿蘇温泉病院 病院支援 ～

その後阿蘇温泉病院に入りました。入院患者250人（内 維持血液透析患者 40人）、併設されている介護老人保健施設の入所者120人、外来血液透析患者70人とかなりの規模の病院施設でした。4月16日の日中に、入院患者210人を耐震上安全であった老人保健施設新館に避難させていました（スタッフの人力のみで移動！！）。水は消火栓から誘導、老健施設は発電車により発電中というライフラインの状況でした。

病院スタッフも被災者であり、避難所・車中泊から出勤している方、病院に寝泊まりしている方が多数いらっしゃいました。スタッフの負担を減らすために、DMATの立場として、患者を何人か転院させるか、あるいは病院避難（患者さん全てを他の医療施設に一旦移す事）が必要であると判断しました。このことについて阿蘇温泉病院の院長としばらく話し合いましたが、院長先生はこちらの考えを理解した上で以下のようにおっしゃいました。

「言われていることはわかる。このままだと疲弊してしまうことも理解できる。しかし転院させてもその場所に家族が見舞いに行くこともできない、万が一亡くなっても迎えに行くこともできないだろう。この地域の人たちばかりだから・・・できることなら病院に留まりたい。看護師と臨床工学技士を派遣して手伝って欲しい」

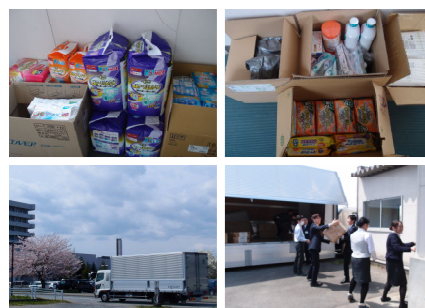
この言葉をうけ、病院避難ではなく病院支援に方針転換しました。DMATを追加派遣してもらい、隊員は来院した急性期患者の診察ならびに他院への患者搬送、病院内における患者移送、病棟看護師の手伝い（清拭など）、透析室におけるバイタルチェック等々を行いました。また日本災害時透析医療協働支援チーム JHAT(Japan Hemodialysis Assistance Team in disaster)の関係者に連絡をとり、ボランティア派遣を依頼。2日後には臨床工学技士のボランティア2名が到着し仕事を開始し、その後も2週間程度ボランティア活動が続いたとお聞きしております。

胆沢病院からも阿蘇温泉病院への物資支援を行いました。現場で足りていないものを胆沢病院のスタッフに伝え、当院スタッフがそれに加えて医療用手袋、オムツ、口腔ケア物品、生理用品、乾電池などを送りました。

阿蘇温泉病院では倒壊の恐れがないと判断された本病棟へ患者さんを搬送することが計画されました。スタッフ、DMATの力では対応困難であったため、自衛隊に協力を依頼。自衛隊の担当者はなんと奥州市出身の隊員であり、人のつながりを改めて実感いたしました。搬送日には30人の自衛隊隊員が病院にきて速やかにミッションは遂行されたそうです。このミッションの道筋をつけたところで胆沢DMAT隊員は3泊4日（1車中泊含む）の活動を終了し帰還いたしました。



4月20日に大分空港から伊丹空港を経て、花巻空港に到着。隊員たちは緊張から解放されホッとした表情を浮かべた。



4月20日、胆沢病院から阿蘇温泉病院への物資支援を行う。現地で足りていないものをトラックに搬入して輸送。

## 8. 活動を終えて

災害時の問題として、被災した人、被災病院がヘルプの声をあげない限り支援が届かないことがあります。今回の阿蘇温泉病院も同様の状況になりつつありました。院長先生のお言葉がそれを物語っています。現場のスタッフの身体的、精神的バックアップがもっと速やかにできるよう今後1人のDMAT隊員として考えて参りたいと存じます。

出動時は家族、院内スタッフはもちろんのこと地域の皆様にも励ましのお言葉をいただき我々の力となりました。心より感謝申し上げます。

「災害<sup>注</sup>は忘れる前にやってくる」と最近は言われます。近年起きている地震、火山噴火、バス事故などは当地でも起こり得るものです。日頃から準備を行うとともに、万が一の時には速やかに活動を開始したいと考えております。今後も当院DMATの活動に対してご理解、ご指導を何卒よろしくお願いいたします。

注：災害は、地震・洪水といった自然災害以外にも、火事・工場事故・飛行機事故・鉄道事故・高速道路事故など多くの傷病者が出る可能性があるものも含まれます。



4月20日夕方、熊本地震被災地での活動を終え帰還。病院職員が胆沢病院DMATチームを出迎え、ねぎらいの花束を贈呈。下田副院長から「経験を職員に還元して今後の活動に役立ててほしい」とエールを送った。